同窓会のチカラ

同窓会のための情報誌

2012

特集● 東日本大震災の中で
　・こころは東北とともに／海が結ぶ絆／ 3.11 を越えて
リレー連載 ● 私と同窓会
紹介 ● 同窓会活動紹介
　・北に一星あり：小樽商科大学 緑丘会
わが学び舎
　・福島県立安積高等学校
ごあいさつ／ご案内

Our Proud

Vol. 4

福島県立安積高等学校／安積歴史博物館
旧福島縣尋常中學校本館（明治 22 年竣工／木造 2 階建／国指定重要文化財 [建造物]）

1 はじめに

東日本大震災を目にして

株式会社サラト

このたび東日本大震災でお亡くなりになった方々のご冥福をお祈りするとともに、この未曾有の災害に遭われたすべての方々にお見舞い申し上げます。

二〇一一年三月十一日、東北地方を襲った東日本大震災が東北の太平洋岸一帯に甚大な被害をもたらしたことは、いまだ生々しく記憶に残っています。震災から一年、被害の全貌が明らかになった今も、残念ながら復旧復興へのロードマップははっきりと見えてはおりません。国を始め地方自治体、また全国の数多くのボランティアによる支援の輪は、当初の緊急対応から、よりしっかりとした「生活」の確保へと移りつつありますが、被災者にとっては相変わらずさまざまなレベルでの困難が続いている、というのが現状です。

こうした中、地域での交流を始め、地域そのものが作り上げてきた社会・文化というものが被災地からの避難に伴い崩壊してしまったケースも数多くあります。これを再び築き上げるには、それこそ気の遠くなるほどの時間が必要であることは容易に想像出来ます。そうした現実の中でも、人は日々生きて行かねばなりません。被災者の立場からは、どのようにして生活を立て直し生きていくかが切実な問題として常に目前にあります。そしてそれはひとり東北だけの問題ではなく、この日本に住む私たち全員の問題でもあります。衣食住はもとより、教育・文化・伝統など、生活に欠かせない事柄をどうしていくのか、解決すべき問題はたくさんあります。

私たちサラトは、同窓会のお手伝いを通して日本全国の地域に密着した事業を展開して参りました。今回被災された地域も、もちろんその中に含まれます。震災発生時には交通機関が麻痺し、停電や通信の不通などによって担当者と一時連絡がとれなくなったケースもいくつかありました。

一方で、直接被災することのなかった地域では、速やかに支援態勢をつくり活動を開始した学校や同窓会も多く見られました。私たちが直接お付き合いを頂いているのは学校の同窓会および学校そのものです。こうした事情から、学校や同窓会組織の動きを目の当たりにする機会が幾つもありました。その結果、日頃から組織された集団の強さ、またその力を再認識したというのが率直な感想です。

はしなくも、今回の震災によって日本人相互の助け合うという気持ちと行動を知ったことは、私たちが日本という国で生きているのだという事実を改めて認識する、という副産物を生んだようにも思います。それは同窓会という、日頃は単なる親睦会とみなされがちな組織においても明らかに感じられました。学校および学生・生徒を支援することをその使命の中心として位置づけている同窓会こそが、直接的な利害や感情を抜きにして、今回のような災害時にも機能するということも確認できたことの一つです。更には、同窓会が母校の外側にある団体であり、常に母校と卒業生、地域にのみ関わっていた存在から、より広い範囲を視野に入れつつあるようにも思います。同窓会の存在意義と意味は、震災後、被災の有無にかかわらず少しづつ変容していこうとしているのかもしれません。

今回「同窓会のチカラ」第四号を発行するにあたり、私たちはこうした視点から震災に際して、同窓会や学校で具体的にどのような活動があったのかを調べ、報告することに致しました。もちろん日本中で無数の支援活動が行われたことでしょうし、それは現在も継続していることと思います。残念ながら限られたページ数では、知り得た全てを載せることは出来ません。ここにあるのは、ごくわずかの事例ではありますが、これからの同窓会活動の一助となることを願ってご紹介する次第です。■

今回の東日本大震災からの復興のシンボル的な存在となった陸前高田市の「一本松」

こころは東北とともに

山形県立山形東高等学校東京同窓会

山形中学校・山形東高等学校 東京同窓会幹事長
遠藤 雅晴（えんどう・まさはる）氏

●連絡先
山形中学校・山形東高等学校 東京同窓会事務局
http://www.uzen33.net/
〒102-0093　東京都千代田区平河町 2-6-3
都道府県会館　山形県東京事務所内
Tel & Fax : 03-3645-7178
E-mail : endmaru@nifty.com

●山形県立山形東高等学校の東京同窓会では、隣県の山形県に避難してきた被災地の子供達に向けて支援の募金活動を行なっている。その経緯と支援の内容を幹事長の遠藤雅晴氏に聞いた。

今回の震災は、被災者だけではなく全国の人が呆然とした、まさしく未曾有の災害だったと思います。こうした大規模災害が発生しますと、あちこちで義援金の募金や、現地へのボランティア支援活動が湧き起こります。私たち東京同窓会でも、山形とは別に募金活動をしようということになりました。山形東高等学校の卒業生は進学などで東京に出てくることも多く、山形に次いで規模が大きいものですから、とりあえず東京は東京で独自に活動を始めようということになった訳です。

募金は同窓会の年会費の払い込みの際に全員に送る振込用紙に、こちらで二千円の義援金を上乗せした金額（五千円）を印刷することで行ないました。義援金の金額は払い込みの際に訂正することも可能です。二千円という金額に特に根拠はありません。ひとつの目安です。

このやり方はやや強引な形でしたが、一般会計とは別に特別会計の設置を決め、透明な形での会計処理をすすめることを七月の総会で説明し、賛同を得ました。今求められているのはスピード感のある支援であり、一方それが目に見える形であることも必要だったのです。

もちろんこうした考えに至る前に、他の同窓会支部にも問い合わせましたが、対応はさまざまでした。また寄付行為には幾つかの問題があることも分かりました。それで同窓会として特別会計を臨時に設け、ここから全額を寄付することにしました。

こうして集まった義援金は、当初、赤十字に寄附する案も考えたのですが、会員からその使途についてさまざまな意見が出ました。一番の気がかりは、いつどのような形で被災者に義援金が渡るかが見えなかったことです。山形県庁に渡すという案も出ましたが、結局は赤十字に渡されるのでは同じことです。そこで東京同窓会としてこれでいいのか議論を重ねました。

まず山形県の避難者の現状を調べたところ、福島県からの避難者が多いこと、避難先は県内全域にわたることなどがわかり、さらに山形県ＰＴＡ連合会の存在を知りました。ここでは独自に義援金の分配が可能であることがわかり、ここを通して避難者に届ける、という条件付きで義援金を渡すことになったのです。

二〇一一年の四月十日から開始した募金活動と並行して、使途や寄付先の選定、その他の検討が始まりました。山形県教育庁の関係者と協議した結果、

一、義援金の使途は、岩手・宮城・福島の三県から山形県が受け入れている被災児童・生徒の支援とする。
二、寄付先は山形県ＰＴＡ連合会とする。
三、具体的な活用方法としては、山形県ＰＴＡ連合会で被災児受け入れ小中学校に配分し、それを受けた各学校で図書やボール等を購入し、児童・生徒の学校生活に活用する、

という形にまとまりました。七月二十日に義援金八十万円を贈呈、八月に県内十一カ所の小中学校に配分されました。その後、今年三月にも二十万円を寄付することができました。

児童の多くは母親と子供だけで避難し、また両親と別れて慣れない生活を送っている子供もいます。そして避難してくる子供達は増えているというのです。見知った友達もいない子供達には、経済的困難に加えてこれから見通しのたたない未来が待っています。現実の問題として、被災地となったふる里に戻ることが難しい子供達もいるでしょう。そういう子供達に何が出来るか、私たちは今後も引き続き支援を続けて行きたいと考えています。東北人らしく、素朴に「こころは東北とともに」と念じながら。■

山形市立千歳小学校での義援金贈呈式でボールを手渡す小林義和会長
（2011 年 7 月 20 日）

山形市立千歳小学校から届いたお礼の色紙。

海が結ぶ絆

静岡県立焼津水産高等学校

私たちにできる事をこころをこめて行い 東北の復興と再生を願う

実習船「やいづ」船長
鈴木克己（すずき・かつみ）氏

震災当日、岩手県立宮古水産高校の実習船「りあす丸」は宮古港が使用不能となったため焼津港に寄港、そのまま一ヶ月余繋留されていた。その間、焼津水産高校の生徒たちによる支援運動が起こる。この支援活動の経緯と現地での支援活動を焼津水産高等学校の実習船「やいづ」の船長・鈴木克己氏と一等機関士の天野聡氏に聞いた。

二〇一一年三月十一日、東日本大震災の発生時、大津波警報が太平洋岸すべてに出されました。焼津水産高校の実習船「やいづ」は、修理点検のためドックに入っていましたが、約一・五メートルの津波を受け、船底に損傷を受けてしまいました。このため、静岡県から要請のあった被災地支援の活動ができず、まことに残念でした。

ちょうどそのころ、岩手県立宮古水産高等学校の実習船「りあす丸」が、水揚げのため焼津に入港したのですが、震災により宮古港が使用不能となったため、そのまま焼津港に停泊することになりました。震災発生から一週間後、当初生徒たちをバスで宮古に帰すことになりましたが都合がつかず、結局、乗組員と生徒全員が伊丹から花巻まで空路帰郷することになりました。

一ヶ月ほどして宮古港の再開の目処がたち、「りあす丸」の出航も四月二十三日と決まったのを受け、同船に支援物資を託す運動が焼津水産高校の生徒会から湧き起こります。生徒会が、学用品を中心にひとり一品を持ち寄る「一人一品運動」を提唱するや、これにPTAや教育委員会などが加わり、最終的にノートその他の物資が段ボール三百箱ほどにもなったのです。

出航の前日に支援物資を積み込み、翌朝「りあす丸」は宮古港に向け出発しました。「りあす丸」の畑川秀雄船長は、自身の住宅も被災し避難所生活を送る中、始業式までには支援物資を生徒に届けたいと申され、深く感銘を受けました。「りあす丸」は途中、放射能汚染を避けるため、原発から一〇〇キロメートル以上も離れて航行し、大きく迂回して宮古港に無事到着したと聞いております。これは外国へも寄港する実習船としての配慮です。

五月、宮古水産高等学校から感謝状が届きました。世界的な魚の需要が増すなか資源としての魚は減少し続け、日本の水産業にもやや翳りが見えています。私達は同じ水産高校として、格別の友情と連帯をもって今後とも宮古水産高校と交流を深めていきたいと考えております。その一つとして、二〇一二年の春、可能ならば実習航海の際に宮古港に寄港し、宮古水産高校と交流会を開きたいと企画しています。■

岩手の実習船 帰路に
焼津水産高生らが学用品
船長、善意に感謝

静岡新聞・2011年4月24日の記事

※長期にわたって漁業の不振が言われているなか、焼津水産高等学校はむしろ活発化しており、航海、漁業、水産加工その他の水産関係のプロを目指し、現在五百人近くの生徒が学んでいる。年に六回ほどの実習航海もあり、生徒は専攻にかかわらず在学中一回は乗船し航海を体験する。大学進学者を除く卒業生の就職率は一〇〇%。漁師になるのは全体の二〇%くらい。元気のいいユニークな高校としてマスコミに取り上げられることも多い。

※二〇一二年三月六日と三月二十日、午後七時より、テレビ朝日系列の「トリハダスクープ映像」で二回にわたって紹介された。

焼津水産高等学校の実習船「やいづ」

静岡県立焼津水産高等学校
http://www.yaizusuisan-h.ed.jp/
〒425-0026　静岡県焼津市焼津 5-5-2
TEL 054-628-6148

実習船「やいづ」一等機関士
天野　聡（あまの・さとし）氏

静岡県では被災地にいちはやく救援本部を設け、スタッフやボランティアを派遣した。焼津水産高等学校の実習船一等機関士の天野氏もその一員として被災地で復興活動に従事した。その時の印象などを聞いた。

東日本大震災発生直後から、静岡県では支援体制を発動し、現地に災害支援本部を設けました。その要請を受けて、県と市によるチームが結成され、震災から約一ヶ月後の四月九日から一週間、岩手県大槌町と山田町の二カ所に分かれて活動しました。余震が頻発する中での作業です。私は山田町で物資や食料品の搬送、学校再開に向けた支援物資搬送等に従事しました。

四月初めの東北はまだ寒く、津波被害の大きさとあいまって、山田町にはそれこそ寒々とした景色が広がっていたのを覚えています。その中で瓦礫の撤去作業が行なわれていましたが、いまだ手つかずの所も多く、瓦礫を積んだダンプカーや物資運送車輛が行き交っています。そうした車が巻き上げる砂埃はものすごく、マスクなしではこのエリアに入ることは出来ませんでした。しかしこのような壊滅的被害を受けたにもかかわらず、被災者は寒い中、配給や炊き出しに何時間も整然と並んでいます。混乱など一切なかったことが印象的でした。

作業の中には支援物資の仕分けなども含まれます。中でも大変だったのが、全国から送られて来た衣類でした。衣類というのは食料などと違い、一枚一枚分別しなくてはなりません。この作業は一般ボランティアのみなさんが担当されましたが、膨大な量に立ち向かう姿には実際頭が下がりました。もちろん衣類に限らず日用品や学習用具などの生活物資にも同様の作業が必要です。集荷、分別、仕分け、再梱包などに加え、搬送しやすい単位にすることなど、災害時の支援物資の在り方も、実際に現場に立ってみて考えさせられたことのひとつです。

わずか一週間の活動でどれだけ役に立ったか分かりませんが、元の生活に戻ろうとする人々の姿を一部であれ目にして、必ずや復活を遂げて新しい生活を始めることと確信しています。

※二〇一一年の夏、静岡県は県内の高校生のボランティアを募り、焼津水産高等学校からは男子生徒四名が参加した。■

▲震災後の岩手県山田町

静岡県派遣のボランティア▶

岩手県立宮古水産高等学校からの感謝状

拝啓

新緑の候、焼津水産高等学校の皆様におかれましてはますますご隆盛のこととお喜び申し上げます。

さて、この度は文具や衣類、お茶などたくさんの品々を頂戴しました。皆様の温かいご支援に心から御礼申し上げます。

被災当時はＴＶなどで御覧になられたと思いますが、津波は堤防を乗り越え、家や車、船などが流されました。本校でもグラウンドは泥まみれとなり、また、被害を受けた別の高校の生徒達が、私達の学校で勉強しています。今では大分復旧作業が進み、グラウンドは元通りになってきていますが、まだまだ使えません。

地域では、自衛隊や警察の協力もあり、時が経つにつれてがれきの量が減ってきました。復興に向け、一歩一歩前進しています。震災以前の状態に戻るまでたくさんの時間がかかると思いますが、明るく前を向いて進んでいきたいと思います。この度は本当にありがとうございました。

敬具

平成二十三年五月十六日
岩手県立宮古水産高等学校
生徒一同

3.11を越えて

左・熊谷光人（くまがい・みつと）氏　岩手県立高田高等学校同窓会会長
右・角舘　覚（かくだて・さとる）氏　岩手県立高田高等学校・教諭／同窓会事務局担当

●連絡先：〒022-0006　岩手県大船渡市立根町字萱中215-1
岩手県立高田高等学校・角舘　覚
TEL：0192-26-5565（職員室）FAX：0192-26-5581
E-mail：kakudate-satoru@tak-h.iwate-ed.jp

岩手県立高田高等学校

●震災時、陸前高田市の岩手県立高田高等学校もまた津波に襲われ、校舎は使用できないまま二〇一二年二月現在再建の目処はたっていない。隣接する大船渡市の旧岩手県立大船渡農業高等学校の校舎を借用し、震災後の二〇一一年五月、一ヶ月遅れで学校を再開した。

二〇一一年三月十一日の震災についてはみなさんご存知の通りです。たくさんの人が亡くなり、また行方不明になりました。中でも陸前高田は市の中心部が壊滅的打撃を受け、津波から一年を経た現在もなお復旧の見通しがたっていません。校舎は大きく破損し使えなくなりました。幸い隣接する大船渡市の旧県立大船渡農業高等学校が学校統合により空き家となっていたのでそのまま間借りすることとなりました。とりあえず学校のスペースは確保できた訳です。

ただ学校の規模が異なるため教室の数が足りず、会議室などを仕切って教室を作ったりしなくてはなりませんでした。その結果、図書室などのスペースがなくなり、学校としては不完全な状態を余儀なくされているのは残念であり、また生徒たちに対して申し訳ないという気持ちでおります。

二〇一一年三月卒業生を含め生徒二十一名が死亡、生徒一名と教職員一名が行方不明という惨事ではありましたが、多くの方々の支援を受けながら、とにかく夢中でここまでやってきた、というのが実感です。岩手県としては二〇一四年度末に新校舎を完成させるとしていますが、建設場所は決定しておらず、他に適当な土地もないため、結局は山を切り崩して用地を確保することになるかと思われます。

こうしたなか、高田高等学校同窓会としては、校舎の復旧その他について市に陳情するなどの他は大したことが出来ていません。と言いますのも、そもそも多くの同窓生が家を失い、仕事を失っている状況下では、まず自分の足下を固めることが第一だからです。一方、同窓会の東京支部と盛岡支部では震災直後から学校支援のための募金活動を開始し、使途についての条件を付けずに寄付をしております。これは学校にとっては大変有難く、例えば部活の遠征などにかかる旅費等の補助にも充当するなど、学校全体としての弾力的な運用が可能となります。

また陸前高田には、二〇一一年中におよそ九万七千人のボランティアの方々が来て下さいました。さまざまな形で復旧に力を貸して下さったすべての皆さんには深く感謝しております。高田高等学校について言えば、生徒の三分の二が何らかの被災をし、三分の一の生徒が仮設住宅などからの通学です。現在、学校の置かれている大船渡と陸前高田の間はスクールバスを運行しております。陸前高田の海沿いは壊滅しましたが、その外側の高台では被害はほとんどありませんでした。学校の「移転」と授業開始の情報などは、電気と電話が不通だったため、手分けして避難所や地域をまわり、張り紙をしたりテレビ局にテロップでの情報通知をお願いしたり、またラジオ番組中で情報を流してもらったり、あれやこれやの方法で周知をはかりました。

絶望的な状況ではありましたが、それでも校舎が確保できただけでも幸運でした。陸前高田の町はテレビ等でご覧の通り、復旧の前途は遼遠であると言わざるを得ません。地元の同窓会の役員や理事は、同時に陸前高田の町に対しても大きな責任を負っています。そして現状は、各個が各個の立場で最善を尽すことが求められています。高田の町の復旧・復興と高田高等学校の復旧・復活は同時のものなのです。■

※震災の後、角舘先生から、津波で失われてしまったので同窓会名簿の余分があったら分けてほしいとのリクエストがありました。名簿は二〇一〇年四月に新たに発行したばかりで、サラトでは保存資料から十部を確保、お見舞い方々お届けすることができました。それから一年近くたった取材時、仮校舎で行き会う生徒たちが男女とも一人残らず元気に大きな声で「こんにちは」と挨拶をしてくれたのが強く印象に残っています。

高田高等学校の現状（2012年2月17日撮影）

Relay Essay

私と同窓会

清藤 紀子

同窓会名簿からのメッセージ

弘前大学教育学部附属中学校同窓会・会長
清藤 紀子（せいとう・のりこ）氏
（昭和 31 年卒）

一二、〇九八

この大きな数字は平成二十二年八月時点での弘前大学附属中学校同窓会の会員数である。（物故者、旧職員を含む）附属弘前中学校は昭和二十四年に、附属駒越中学校は二十五年に最初の卒業生を出し、その後昭和四十年の合併により多くの卒業生を輩出し今日に至っている。

昨年多くの方々のご支援、ご協力により二度目の名簿が発行された。早速K先輩から、表紙がさわやかで充実した内容の立派なものを作った旨の、とても嬉しいお電話を頂戴したことは記憶に新しい。

私は名簿を大切にしている。なぜならそれは私にいろいろなことを語りかけてくれるからである。東日本大震災という未曾有の大災害、福島原発事故が起きた今年、思わず開いたのは一七六ページの『県別分布数』であった。このページには北は北海道から南は沖縄まで、そして国際社会にふさわしく海外在住の会員の人数が記されている。

岩手、宮城、福島、東京…に住まわれて被災に遭った方々、そしてそこに親戚や知人がいらっしゃる方々に思いを馳せお見舞いを申し上げることしかできないことをとてももどかしく思っている。

住所を明記している会員の多くは青森県の津軽地方に住んでいる。（もっとも諸事情により実家を住所にしている場合もあると思われるが。）次いで東京、神奈川、千葉、埼玉、宮城と続く。会員の皆さんの各方面での活躍を伺い知ることができる。

ほとんどが恵まれた中学生時代を過ごした人たちであった。それは、豊かな自然環境であり、また、未来へ繋がる人的環境であったと私は思っている。岩木山を望む穏やかな津軽平野で過ごしたことは美しいものへの憧れを、また常に自分の良さを大切に接してくれた友達や大人たちからは人を思いやる優しさを、ひとり一人が心のどこかに秘めていると思うからである。

震災後、マスコミを通じて「ふるさと再考」「絆の大切さ」「自分にできることは何か？」の言葉を聴くことが多くなった。人は精神的、肉体的に大きなショックを受けたとき、今後の生き方を真剣に考え、賢くなっていく。それは大人も子供も同じなのではないだろうか。そしてそれらの言葉は同窓会の神髄に迫るものでもあると思う。

この先、会員名簿は私に何を語ってくれるのか楽しみである。

（この文章は平成二十三年十月の同窓会会報に掲載したものです）

筆者プロフィール

昭和 16 年満州ハルピン生まれ。
昭和 20 年両親の故郷である青森県弘前市に引き揚げる。
　弘前大学教育学部附属弘前小学校・中学校卒業。
昭和 33 年県立弘前中央高等学校卒業。
昭和 38 年弘前大学教育学部家政学科卒業。
　弘前大学教育学部附属弘前中学校・附属中学校勤務。
平成 13 年弘前大学教育学部附属中学校退職。
　弘前大学教育学部非常勤講師（～ 21 年）。
現在、弘前厚生学院非常勤講師・平川市社会教育委員・学校評議員・知的障害施設のオンブズマンなど。

弘前大学教育学部附属中学校

2 北に一星あり

公益社団法人 緑丘会
公益財団法人 小樽商科大学後援会

人材と企業を結びつけ、
次世代のビジネスリーダーの育成に寄与する

小樽商科大学卒業生就職支援事業

創立百周年を迎えた小樽商科大学では、卒業生による二つの組織が揃って公益法人格を得た。その公益法人化への道のりを、両組織の事務局長に聞いた。

北に一星あり 小なれど その輝光強し

小樽商科大学は、ご存知の通り北海道小樽市にある国立大学です。明治四十四年（一九一一）の設立ですから、昨年でちょうど百周年、今年から新しい一歩を踏み出したというわけです。商学部のみの規模の小さな所帯ですが、それだけに団結力といいますか、卒業生の結びつきが強い。戦前までは高等商業学校（小樽高商）と呼ばれていました。第一期生は七十二人だったと聞いています。

その結束の力は開学以来連綿と続いておりまして、先達のご苦労の結果、後に続く者もそれぞれ社会の中で相当の地位に就き、また後進の手を引き、社会の中で育成していくという良き伝統が今日まで引き継がれているのは、卒業生として誠に嬉しい限りです。

同窓会と後援会 母校と卒業生を支援する二つの組織

小樽商科大学には卒業生による組織が二つありまして、ひとつが「後援会」。これは母校そのものを支援する団体で、たとえば学生寮を建てるとか、札幌にサテライト校を開設するなどというときに募金活動を行い、寄付するなどのことを行なっています。今ひとつは「緑丘会」と申しまして、いわゆる同窓会です。しかし私どもの同窓会「緑丘会」は、会員（卒業生）相互の親睦をはかるという同窓会本来の趣旨に加えて、卒業生と実社会の企業とを結びつけるという大きな使命も担っています。まあ簡単に言えば就職活動支援ということになるわけですが、単に企業を紹介するというレベルではなく、セミナーを開いたり合同企業説明会等を催したり、また個々人の希望と企業の希望のマッチングをはかる役割も担っているのです。無論、これは大学の指示で行なっているわけではなく、あくまで社団法人としての活動です。

大学で学んだことは社会に出て活かすべきであり、そうすることで個人も企業も活きてきます。そのためには本当に自分に合った企業を見つけるべきですし、企業もまた真に役立つ人材を採用したいわけです。その、いわば仲人のような働きをしている。でもそのためには、それなりの環境も整えなくてはなりません。

開かれた同窓会の拠点として

ご覧の通り、ここ「緑丘会館」は、東京・池袋のサンシャイン60の五十七階にあります。広さは八十坪ほどです。ここは「後援会」が家主となっているスペースですが、なぜここなのかと言いますと、まず企業は東京に集中している。さらに監督官庁等とのやりとりなどに至極便利なわけです。加えて東京で就職する者が六割を超えましたから、卒業生にとっても、東京に気の置けない拠点があったほうが何かと心強い。また企業の方々をお招きするにしても、都心ですから大変都合がいい。そうしたわけでこのビルの竣工と同時に、この場所を確保したわけです。そのような事情で今ではここが本部になっています。

このスペースは確かに「緑丘会の会館」ですが、北海道の他の学校の卒業生にも開放しています。ですからここで同窓パーティーを開く他校のOBも多い。小樽商科大学OBオンリーというわけではありません。人との繋がりを大切に思えば、こういう形になるのは必然です。現在では北海道に限らず、広く一般の方にもご利用いただいております。

社会とともに歩み 社会のなかで活きる大学へ

先ほども触れましたが、小樽商科大学では札幌の駅前にサテライト校を設け、大学院の授業を行っています。サテライト校という発想とネーミングは、おそらく小樽商科大学が最初だと思います。今ではあちこちで開かれていますね。大学院の場合、社会人が資格を得るために来ることが予想されましたので、そういう方々の便を考えてこういうスタイルを創設したわけです。「開かれた大学をめざす」とよく言われますが、大学の最も重要な機能は教育ですから、キャンパスを飛び出して社会の中に大学が入って行くのは、私たちにすれば自然な成り

▲小樽商科大学正門

公益社団法人　緑丘会
http://www.ryokyu-web.net/
E-mail : ryokkyukai@axel.ocn.ne.jp
公益財団法人　小樽商科大学後援会
http://otaru-uc-koenkai.net/index.html
E-mail : info@otaru-uc-koenkai.net
〒 170-6057 東京都豊島区東池袋 3-1-1
サンシャイン 60 ビル　57 階
TEL 03-3981-2340

左・公益財団法人 小樽商科大学後援会事務局長
小塚邦夫（こづか・くにお）氏
右・公益社団法人 緑丘会事務局長
桶谷喜三郎（おけたに・きさぶろう）氏

行きでした。こうした施設は、国立大学の場合、予算措置が大変難しく、そのために「後援会」が卒業生に呼びかけて寄付金を集め、実現に漕ぎ着けたという経緯があります。この「緑丘会館」もサテライト校と同一の思想の下に出来たものとも言えるでしょう。

公益法人としての新たなる歩みを踏み出して

記念すべき創立百年目の二〇一一年、後援会は、国立大学同窓会系の組織として「公益財団法人」第一号に認定されました。これは二〇一三年までに、全ての社団法人と財団法人は公益法人か一般法人への移行か解散を選択するとする公益法人制度改革に沿ったものです。同様に百一年目の二〇一二年、後援会に続いて緑丘会も公益社団法人に認定されました。これも第一号です。緑丘会は、先にも述べましたように、卒業生と企業一般とを結びつけることを活動の大きな柱としています。それも長きにわたって行なって来たという実績があります。これが認定に結びついた大きな要因でしょう。大学の機能たる教育と、その結果としての有為の人材の社会への供給は、言うまでもなく公益そのものですから。

大学としての新たな世紀に入ったいま、私たちはこれまでの強い絆を大切にしつつ、新しい形での大学の在り方を考え、より社会の役に立つ組織として、この「後援会」と「緑丘会」という両輪を確実に前進させ、次代のビジネスリーダーを育てていく所存です。■

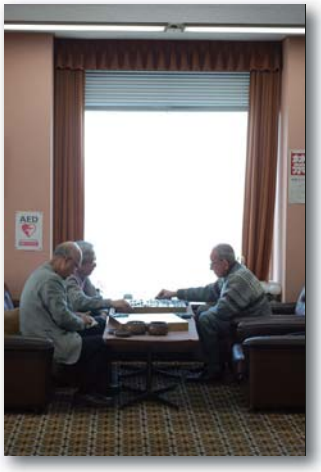
▲緑丘会館から新宿副都心を望む

緑丘会館のご利用について

緑丘会館は昭和 55 年 4 月にオープンした全国緑丘会の活動の中心的存在です。東京池袋サンシャイン 60 ビルの 57 階南西角に位置し、晴れた日には富士山や新宿の高層ビル群が楽しめます。

100 人程度の同期会、懇談会、講演会、また職場の会議、研修会等にもご利用いただけます。小樽商科大学同窓生以外の利用も可能です。詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

●所在地
〒 170-6057 東京都豊島区東池袋 3-1-1
サンシャイン 60 ビル 57 階
TEL 03(3981)2340 / FAX 03(5396)4011
●開館日：平日／月曜～金曜　10am ～ 9pm
休館日：土曜、日曜、祝祭日、年末年始、
8 月夏休み
●ご利用方法
予約制となっておりますので、あらかじめ事務局まで、日時、人員、飲食内容、利用時間などご連絡願います。



Our Proud

3 わが学び舎

福島県立安積高等学校安積桑野会

文武両道、質実剛健を掲げて

自由闊達の中に質実剛健を実践

沿革

福島県立安積高等学校は、明治十七年（一八八四年）九月、福島縣福島中學校として開校、明治二十年（一八八七年）福島縣尋常中學校と改称、明治二十二年（一八八九年）現在地に移転する。明治三十四年（一九〇一年）福島縣立安積中學校と改称。昭和二十三年（一九四八年）学制改革により福島県立安積高等学校となる。翌年「安積桑野会」として同窓会が発足する。昭和三十八年（一九六三年）から昭和四十八年（一九七三年）にかけて新校舎が建てられ、旧本館は福島県重要文化財に指定され、次いで昭和五十二年（一九七七年）国重要文化財に指定される。昭和五十九年（一九八四年）創立百周年記念事業として旧本館を「安積歴史博物館」として新たに開設、現在に至る。平成十三年（二〇〇一年）より男女共学となる。平成十三年（二〇〇一年）第七十三回・選抜高等学校野球大会に第一回目の「二十一世紀枠」出場校として出場する。

安積高等学校の精神は『開拓者精神・文武両道・質実剛健』にあり、教育の方針として『個性を伸長する・知性と情操と実践力を養う・自主自律の精神を養う・質実にして真摯な人物を養成する』ことを標榜している。自由な校風と伝統を守り、男女共学を期に服装も自由となるなど、各人の良識にまかせる自由闊達な校風でも知られる。

著名な卒業生の中には作家・文筆家が多く、古くは明治の文豪・高山樗牛、鈴木善太郎が、大正から今日にかけては久米正雄、中山義秀、玄侑宗久などがいる。また天文学の新城新蔵、歴史学の朝河貫一、作曲家の湯浅譲二などを始めとして、学問・芸術・政治など、広い分野で多数の才能を輩出している。■

表紙写真・解説

安積歴史博物館
（旧福島縣尋常中學校本館）

福島縣尋常中學校本館として明治二十二年三月に建立された明治期の代表的な洋風建築で、二階建玄関付桟瓦葺木造の鹿鳴館風の建物である。

昭和五十二年（一九七七年）国重要文化財（建造物）に指定され、翌年、初期の姿を再現するために、文化庁の指導により半解体修理工事が行われた。創建から百二十年余、創建の場所に創建時そのままで現在に残る全国唯一の文化財である。

二〇〇九年放映されたＮＨＫドラマ「坂の上の雲」第一部のロケにも使われた。表紙に使用した写真は震災後のもの。■

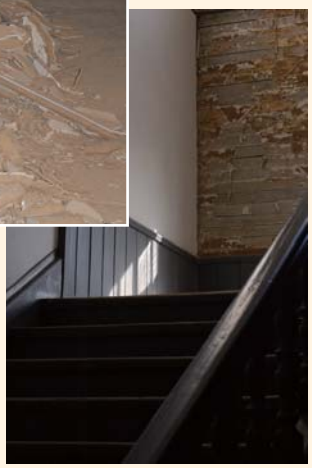
▲震災前の講堂

▲震災前の安積歴史博物館／奥に安積高等学校が見える

安積桑野会（福島県立安積高等学校同窓会）
http://www.asaka-kuwano.jp/
〒963-8851 福島県郡山市開成 5-25-63
福島県立安積高等学校内
TEL (024) 922-4310(代)　FAX (024) 931-5313

▲震災前の安積歴史博物館

▲ 二階中央廊下。ほとんどの漆喰が剥がれ落ち、入ることはできない。



剥がれ落ちた階段の漆喰 ▶

復興支援へのお願い

安積歴史博物館は、二〇一一年三月十一日の東日本大震災により損壊し、現在復旧の調査・計画が進行しています。激しい揺れのために貴重なガラス窓が壊れたり、漆喰は剥げ落ちたりして、一時は足の踏み場もないほどでした。建物は国重要文化財に指定されていますので、所有管理する財団法人・安積歴史博物館としても勝手に修理することはできません。文化庁の指導のもと、復旧工事に入るわけですが、現在のところ復旧時期は見えておりません。

財団法人・安積歴史博物館は、県立安積高等学校やその卒業生の団体である同窓会・安積桑野会の支援を受けながら、これまで管理運営して参りましたが、今回の震災による損壊の修理にあたっては国が一〇〇％費用を持つわけではなく、かなりの費用を所有者である財団法人・安積歴史博物館が負担しなければなりません。

こうした事情から、財団法人・安積歴史博物館では、同窓会はもとより広く一般の協力を仰ぎ、この歴史的遺産を後世に残すべく努力をしております。しかしながら普通の建造物とは異なることと、国重要文化財の指定を受けているため、当然のことながら文化庁の求める基準はハードルが高く、予算の捻出に苦慮しているというのが実際です。

このような状況をご理解の上、皆様のご支援をお願いする次第です。■

●財団法人 安積歴史博物館
〒963-8851　福島県郡山市開成 5-25-63
TEL & FAX　024-938-0778
◎安積歴史博物館は東日本大震災により損壊したため、当分の間、休館いたします。

●震災復興寄附のお願い
博物館の復興のために、皆様のご協力をお願いいたします。

安積歴史博物館 震災復興寄付受付口座
郵便払込取扱票＝ 02250-6-125793
加入者・安積歴史博物館震災復興委員会
※なお、税制上の優遇措置は現在申請予定です。

安積歴史博物館の詳細は HP をご覧下さい。
http://asaka-kuwano.jp/hakubutukan/index.html

Message

ごあいさつ

株式会社サラト・代表取締役
福田 裕一（ふくだ・ゆういち）

福田 裕一

東日本大震災を特集するにあたって

日本中を揺るがした東日本大震災が発生してから一年がたちました。当初絶望的にも思えた惨状も、復興に向けて少しづつであれ進んでいるのは喜ばしいことです。改めて被災者の方々にお見舞い申し上げるとともに、全国の方々のご支援や復興作業に従事している多くの方々のご努力に対し敬意を表します。

私たちは震災直後から被災地の学校・同窓会を訪問し情報の収集に当たってきました。私自身も三度にわたって現地の学校や同窓会を訪問し、お話を伺う機会を得ましたが、三陸から関東北部の沿岸では多くの学校が機能不全に陥り、また福島県では原発事故の影響で、広範囲にわたり住民の生活そのものが厳しい状況にあることは報道等でご存知の通りです。

こうした事態を正面からとらえ、本誌第四号は「震災特集」として震災に関係する学校・同窓会の動きを取材することに致しました。もとより限られたスペースではありますし、掲載できたのはほんの僅かな事例に過ぎません。

今回の発行にあたっては、一般の報道とは異なり、あくまで「同窓会」としてどう動いたのか、という視点から取材致しました。しかしながら直接被害にあったところでは、学校もさることながら、そもそも生活そのものが危殆に瀕しています。そうした事態の下では同窓会活動は難しいと言わざるをえません。震災から一年が経った今もなお見通しの立ちにくい状況にあるのは学校もまた同じです。こうした現実に対し、同窓会とともに歩む者として何ができるのか、私たちサラトはこれからも考え行動して参ります。

お知らせ

●制服リカちゃんに新しい仲間が増えました

ご好評をいただいています「オリジナル制服リカちゃん」に新しい仲間が増えました。昨年（平成二十三年）「土佐女子高校（高知県）」「栃木県立栃木女子高校」が完成しました。ともに創立百十周年記念の企画です。お陰様で好評のうち完売となりました。

今年度は「栃木県立佐野女子高校（現佐野東高校）」と「宮城県第三女子高校（現仙台三桜高校）」が新たに仲間に加わります。両校とも女子校から共学校へ移行し、思い出の女子校時代の制服リカちゃんです。

宮城県第三女子高校　佐野女子高校　栃木女子高校　土佐女子高校

© TOMY

●スマートフォン対応の簡易型ホームページ

サラトでは、同窓会からの要望の多い安価な初期作成費・低ランニングコスト（維持費）の簡易型ホームページをスマートフォン対応へと進化させました。若い世代の会員への情報発信が低予算で可能となります。是非お問合せ下さい。

サラトは昨年（平成二十三年）、全国百七十四校の同窓会名簿を納品させていただきました。東日本大震災の中ご協力いただきました同窓会・学校・会員の皆様に、心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

同窓会のチカラ 2012年号／Vol. 4
（2012年5月 発行）
編集・発行　株式会社サラト
本社・〒670-0948 兵庫県姫路市北条宮の町172
TEL 0120-138-000 ● FAX 0120-917-523
東京支社・〒101-0021 東京都千代田区外神田5-2-3
JR外神田ビル6F
TEL 0120-03-6381 ● FAX 03-3832-6389
E-mail　eigyo@salat.co.jp
URL : http://www.salat.co.jp
SALAT
Salat Corporation